
2次コンおんらいん。

恵恋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2次コンおんらいん。

【Nコード】

N0312G

【作者名】

恵恋

【あらすじ】

ここは異世界大陸デニオス。さまざまな種類の戦士達が自分の時を過ごす豊かな世界。ある者は狩りに行って強くなったり、ある者は商売をたしなむ場である。その大陸に存在していたレイヴという銃使いがある日突然、削除された。なんでだあああああ!!!? ? 自重します。あらすじ的には重度の2次元中毒者、拓也がオンラインRPGのゲーム内で仲間といろんなことをするコメディイデス。

Now Loading . . . 0%

「ザコいな」

少年Aはパソコンの目の前でそんなことを呟きながら、カタカタとキーボードを打っていた。

「やっぱし俺のレイヴは強いな。一撃だぞ」
全て独り言だ。悪いか？

とりあえず、ね

「ほら、拓兄^{たく}、起きなよお。早くしないと遅刻しちゃうぞ？」
目を閉じていてもほんの少しだけ、いや、ものすごく眩しい。
うつすら目を開けると妹が俺の体に乗っている。

「うわあっ、やめる！俺はロリコンじゃないんだっ！！」

「朝から何言ってるのよ？おかしな拓兄。ほら、もうご飯だつて出来てるんだから早く支度して？」

「・・・」

なんだ、玲奈^{れな}か。

玲奈は中学2年生。ちなみに俺は高校1年生だ。

生まれつきの持病で喘息を持っていて、あまり体は丈夫ではない。性格も内気で、例えるとクラスの中のバカっぽい男子たちがこれまたバカな事をして主力的女子が大笑いしているのに、奥の隅のほうでクスクスと密かに笑っているアレだ。

普段は頭の上のほうで二つに結んでいる。いわゆるツインテールと言う奴だ。

可愛いとは思うが、俺のドツポには入らない。

玲奈は部屋を出て行って階段を降りていった。

ベッドの下には数冊の工口本やなんやらが種類別に重ねてある。きれいではない。

あんまり玲奈には部屋に入ってきて欲しくない。

しばらくぼけーっとしていると携帯のアラームが鳴り出す。

「あ、そうだ。今日学校だ」

こういふ高校生もどうかと思う。

高校生になって最初の夏が来た。

一体いつからを夏というのかは知ったことじゃあないが、とりあえず暑くなったら夏なのだ。

それでいいんじゃないのか。

梅雨も過ぎた真っ青な快晴の空を見上げて、俺はとてもためになる教師の言説を聞き流し、授業のたるさを満喫していた。

退屈だ。素晴らしいまでに退屈だ。そして眠気が襲う。

机にくつたりと倒れこんでため息をつく。

きーンきーンかーんきーンのチャイムの音で目が覚める。

無意識に時計を見てみると昼の3時を過ぎていた。今日の授業は終わったのか。

教室の一番前の席でぐったりしている生徒（俺）はほったらかしにされていたのだろう。

諦められてるんだな、と嬉しくも思わず、悲しくも思わない心境で、

筆箱と財布しか入っていないスクールバックを手にし、教室を後にする。

家はわりと近いほうで、歩いて30分。走ってせいぜい20分だ。家族構成・・・父、母、兄、妹、俺

父と母は結婚25年目だというのに未だその愛は出会った頃と変わらず（本人たちが言うにはの話のだが）、半月後くらいまでは海外で旅行している。

子供は親の元から巣立つのが最終的な仕事だといわれるが、俺の家庭はもはや親が子供放棄して巣立ってしまってしまっている。

でも俺の兄はもう社会人なので、毎日の食事の分は稼いでいける。学費は親がどうにかして振り込んでいるらしい。どうやってやっているのかは知らない。

家に着いて玄関を開けると、その兄が玲奈れなの腰辺りを膝まついて抱きついていていた。

「おっ！お帰りい拓たくう」

「拓兄、お帰りなさい」

「何やってんだ、お前ら」

こんなカタチでお出迎えされて嬉しいなんて思っはすがない。

すると兄は何にエバっているのか分からないが、そんなような態度を取って言った。

「これはロリコンの特権だ！・・・なんだ？嫉妬してんのか？」

「してない。それ以前に俺はロリコンじゃない。玲奈、嫌ならばつきり言ってやったほうがいいぞ？」

「いいの。しょうがないし、言っても聞かなそうだしいいならいい。」

そのままバカな奴らはほつといて2階の自分の部屋に行って荷物を置く前にパソコンの電源をいれる。

俺には毎日夜6時と深夜12時に必ずやる日課がある。

「まだ早いな。しばらく狩でもしておくか」

私服に着替えて椅子に座りキーボードをカタカタ打っていく。何をやっているのか。

オンラインゲーム。ネットゲである。

2年半前くらいから始めたのだが、レベルはまあまあ、そこそこといった感じだ。

ジョブ（職業）は銃使い。名前はレイヴ。装備している服は軍曹のような格好をさせている。

自分で言うのもなんだが、かなりかっこいい。

気に入っているので、データを消そうにも消せない状態だった。

そして消さずにとずっと遊んでいたら、まあまあ強くなったしパーティー（一緒に戦うチームのようなもの）を組める友達も出来た。

そして今日、夜の6時に待ち合わせをしている。掲示板のところだ。しかもそれが、すげえ好みの女の子でウハウハしているところだ。

正直ネットで女の子と話したことなんて2・3回しかない。経験がない出来事が起こり、軽く動揺していると、勝手に話を進められて今日待ち合わせをすることになったのだ。

「ちよつと髪形変えていこうかな」

女の子の名前は『姫』。金髪のショートカットで、目は澄んだ青色。黒いコートみたいなものを着ていた。

ジョブは賢者。魔道士のクラスチェンジ後のジョブで、魔道書と杖、それから短剣を装備できる。

レベルは208と、かなりの上級者で強い。

こんな子とパーティーを組めたら・・・と思うと乱心だ。（冗談）

今の『姫』の設定はもちろん昨日とったメモを見た。

俺には人並みの記憶力がないらしく（決して病気ではありません）こつやつてメモをとっておかないと忘れてしまうのだ。

6時になったら何の邪魔もなくネットゲをやっていたいから先に飯でも食っておくか。

パソコンをスタンバイの状態にして部屋を出た。

下に降りていくと玲奈れながもう夕食の準備をしていた。

そしておせっかいな兄 裕也ゆうやが手伝いをしている。

「あ、拓兄。もう少してご飯できるからもう少し待ってて」

「拓。少しは玲奈の手伝いをしてやるうとかそうゆー気持ちはないのか？」

「俺がやったつてまずいもんが出来上がるだけだよ。せっかくの玲奈のゴチソウにそんなこと出来ないだろ」

「た、拓兄……」

少し赤面する玲奈はかわいい。 可愛い奴め……

「あつ、何だ！さりげない言葉で何となく褒めほめたな？くそ、拓のクセにい」

だがゴチソウと言う言葉に偽りはない。

毎日毎日どんな平凡な料理でも、ものすごくおいしい。どんな隠し味を使っているのかは分からないが、下手したらそこら辺の喫茶店よりもうまい。

今日の夕飯も白いご飯に野菜炒め、卵焼きに味噌汁といったシンプルなコンダテだったがおいしかった。

裕也も「おいしいおいしい」と毎日毎日言いながら食べている。

「もう、お兄ちゃんお行儀悪いよ」

「だって玲奈の作ったご飯おいしいんだもん。拓だってそう思うよな？」

「ああ。この味には文句なしだ。普通にうまい」

「……もう、今更何言ってるの。」

「俺らにとっちゃ、おふくろの味なんだよ」

夕食を食べている間も俺と裕也は玲奈を褒めまわした。

結果ずつと顔を赤くしてパツパとご飯を食べて自分の部屋に行ってしまった。

「あーあ、玲奈行っちゃったじゃん」

「てめーも同伴だろ。皿洗いよろしく」

とって俺は食べ終わった食器と流しに置いた。

「・・・今日の当番は拓だけど？」

「えっ!?!?・・・そうだったっけな？」

「とぼけても無駄だ!ほら、玲奈がこんな可愛い字で書いているじゃないか」

壁に掛けられているミニサイズのホワイトボードを見てみると、

『今日の当番　　拓兄』

とゴシック体のような文字で書かれていた。

しかたない。まだ6時まで少しある。さっさとやって準備しよう。

「じゃあ、がんばってねー」

と言って裕也は2階に上がっていった。

「さてと、やるか・・・」

「よおし、今日は拓の部屋に点検に行こうかな」

そう言って裕也は拓也(主人公の名前)の部屋に入っていく。

「うわー、さすがに多くなってきたなあエロ本。こんなベッドの下にぐちゃぐちゃにして」

しばらくベッドの下のエロ雑誌をあさっていて、ふと机を見てみるとパソコンがスタンバイになっているのを発見する裕也。

「あ、・・・拓はいつもパソコンで何をカチカチやってるんだろうな。ちょっと見てみるか」

そうしてパソコンを立ち上げるとあるページが表示されていた。

「ん?なんだこれ・・・。オンラインRPG?・・・ネットゲか!そうかそうか、こんなものを一生懸命やってるんだな。ふふ」

机を見てみるとメモの切れ端がたくさん散らばっている。その中からランダムでメモを取ってみると、何かのログインIDとパス

ワードが書いてある紙だった。

「ふふーん。きっとこれはこのゲームのだな。ちょっと覗いてみるか」

IDとパスワードを入力してログインする。

そして画面がキャラ選択のページになる。

「うわ、あいつこんなごついアバター（ゲーム内の自分となる分身の事）使ってるのかよ。よし、俺がちょっと手直ししてやるう」

「よし、やっと終わったぞ。」

早くしないと待ち合わせに遅れてしまう。せつかくの女の子との待ち合わせなんだ。遅れてくるわけにはいかない。

急いで2階に駆け上がって自分の部屋に入ろうとドアノブに手をかけた瞬間、中からドアが開いた。

「あ」

裕也だ。

「お前、部屋で何をやってた？」

「・・・いや、エロ本何冊か借りていこうかなって思って、部屋のエロ本あさって、読みたいやつがなかったからいいやゝみたいな感じだ。うん」

「はぁ？勝手に触んなよー。あれでも何がどこにあるか頭の中で把握してるんだぞ？」
「たく。また整理しなくちゃ。ほら、出てけ出てけ」

「はーい」

意外にあっさり出て行った裕也は

「れなああああああ！ー！！」

と叫びながら廊下を走り去った。

さあ、もうすぐで6時だ。ログインしておこう。

スタンバイになっているパソコンを立ち上げて、メモをしたものを見ながらログインする。
すると

『早くプレイしないと撃ち殺すぞ？ばかやろー』

パソコンから女の子の音がする。

このオンラインゲーム、キャラ選択のときにキャラのボイスが勝手に流れるのだが。

え？

なにこれ。

なにこのロリっ子。

ピンクのロリータ服に金髪のツインテールが揺れている。

そのキャラの名は、

「レナ」

「なななあああんだとおおおおおおおお？？？？！！！！！！！！」

Now Loading . . . 0% (後書き)

はじめまして。 恵恋^{えれん}と言います。

物語の舞台はゲーム内という設定なんですが。。。
まあ、今回は初回なわけですし現実世界でもいいですよ？

私、作者も重度の2次元中毒者ですww
けど、ネトゲの経験はあんまりないです(え
お気をつけください(何をだ)

「いったい．．．何がどうなってるんだ？ログイン間違えた？いやいや、そんな事はない。」

「拓兄たくにい！どうしたの？何かあったの？」

部屋のドアをドンドン叩いている。

玲奈れなだ。

「まずい．．．．．今ここで玲奈にこの事を知られてしまったら、

『た、拓兄なんてっ．．．大っつつ嫌い！！』

「い、嫌だ．．．。そんなのは絶対に嫌だっ！2次元オタクが実の妹に嫌われるなんて、これ以上の絶望は他にない。」

「拓兄！大丈夫?!」

「あ、ああ．．．大丈夫だ。そう、大丈夫なんだ。大丈夫大丈夫．．．．．」

「玲奈あ、ちよつとどいて。俺が見てくるから」

と、これもまた2次元オタクな兄、裕也が玲奈をあしらう。

「．．．．．あれ？」

さつき勝手に俺の部屋に入ったのは誰だったか．．．？

「拓、入るよ」

まさか、

「まさか．．．．．」

俺は入ってきた裕也をひどく睨みつけたまま、胸倉を掴む。

「つてめえかああああああ???!?!俺のレイヴを削除した

キーボードを叩く。

「ここはレベル1という初心者の中の初心者特有の質問をぶつけてみよう。」

「すみません>< マグニ大森林ってどちらの方向にあるか教えてくださいませんか??」

返事はどうだ?今、間違いなく姫に向かって喋ったぞ俺。きた。

「この場所からずっと左に行ったところだよ^^ もしかして始めたばかり?」

「はい。そうなんです>< 全然分からなくて・・・^^; 場所教えてくれてありがとうございますm(u)u(m)」

と言っ左に行くアバターレナ。食いついて来い、初心者が困っているんだ。見捨てていくような奴なのか?姫!

「あー、レナ!!ちょっと待って!」
キターーーーーー

「始めたばかりでマグニ行くのはちょい危ないよ。よかったら一緒に行くこうか?狩り」

「え!?!でも何か用事とかないんですか?」

「ああ・・・。もういいよww一応待ち合わせしてたんだけど来ないからいい^^」

待っててくれていたんだ・・・。姫、優しいぜっ!)(キモ

「あ、ありがとうございます!私なんかのために・・・。心強いです!」

「じゃあ行くっか?着いておいで^^ ^^」

姫優しいよ、姫すげえ優しいよ。どうしよう・・・これでツンデレだったらモロ俺のタイプだよ。

そう、俺は2次元の中でもツンデレタイプが一番、「萌ー」というやつがくるんだ。

ツンデレ最高だよ、ツンデレ。

話を変えて、その今向かっているマグニ大森林という森は中級者から上級者が行く狩りの場所だ。レベル1のレナなんかが行けば一発でモンスターにやられて終わりだ。

レベル50くらいになればちょうどいい経験値になるんだが。2年半前が懐かしい。

そんなことを考えながら姫に着いて行くレナ。

「じゃあ、ここらでパーティー組もう」

と、姫が早くもパーティー申請を要求してきた。

申請に対してYESをクリックすると通常画面に戻る。

「よろしくお願ひします」

「うん。あとさレナ、タメでいいからW普通に話して行く?」

「う、うん!」

なんか、今幸せだ俺。

森林の中に入ってウロウロ奥に入っていくとまあ、ウジャウジャとモンスターがごろついている。

姫は賢者だから遠距離から魔法で攻撃することを得意とする職業の持ち主だ。

正直こんなに強い賢者は見たことないけど。

そして俺のアバター、レナも武器が射撃だから多分ハンターという職業に入ると思う。

ハンターには2つ種類があり、弓を使う者とピストルや銃を使う者に分岐される。

どちらのほうがメリットがある、というふうなことは特になく、どっちもどっちといった感じだ。

姫は力の差を見せ付けるかのように、いきなり高度な炎上魔法を繰り出す。

一気に十数体のモンスターが死滅する。

そして一気にレナのレベルが上がっていく。

「じゃあついて来てね」

「はい」

この分なら楽にレベル10までいきそうだ。優しい姫は近づいてくるモンスターを全部1人でなぎ倒していく。

姫のMP（マジックポイントの略。魔法やスキルなどをを使うたびに消費するエネルギーのようなもの）は果てしなく、これだけの敵を倒しても未だ減るような様子は見られない。

強い。それだけが姫に言えることだ。

「よし、粗方片付いたね^^レベルのほうはどう？」

「もう10までいったよ。本当にありがとうww」

「でも、戦い方が分かる？ずっとウチがやっちゃってたから」

「うん。このキャラやる前に少しやってたから、基本は分かるよ」

^^」

たださすがに姫にばかり任せてはられない。女の子に守られてどうするんだ。まあ、一応ゲームの中では、弱い女の子なんだが。

しばらくして姫が言い出した。

「ごめん。今日はもうやめるわ。明日は、レナやるの？」

かなり早いあがりだ。ここまで強いやつは夜中の12時くらいまでやると思ってたんだが。

「うん。速く強くしないといけないから」

「じゃあ明日も一緒に狩り行こうよ。また6時に掲示板で待ち合わせ^^どう？」

「賛成w じゃあ明日。今日は本当にありがとうw」

「いーえ^^じゃね」

ぷちんと姫がいなくなった。

どうしようかな。とりあえず掲示板がある街まで戻るか。まだ弱いほうだから、ここはロリっ子という点を生かして募集でもしてレベルを上げよう。

募集内容・・・一緒に狩りをしてくれる人を募集してます！ぜひ一緒にパーティー組みませんか？

食いついてこない男がいはいはしない。さあ来い！

俺的にはそこそこ強い戦士当たりがいいけど。

さっそく近づいてきた。しかも戦士！武器装備は斧、レベルは83、そこそこだな。

「俺でよかつたら一緒に狩り行こうか？」

「はい^^よろしくお願ひしますww」

名前は「乙津おつ」なんだか呼びにくい名前だな。初対面はだいたい、くさん付けして名前を呼ぶことが多いだろう。だけどこの人、くさん付けすると、

おっさんになるぞ？

いや、ちゃんと乙津さんと呼べばいいだけの話だ。練習練習……乙津さん。乙津さん。乙津さん。乙津さん。乙津さん。おつ……

駄目だ！！

キーボードで打つときも間違っておっさんなんて打たないようにしよう。

でも、おっさんのほうが楽なんだよね。何だかんだ言って。

そんなことを考えていると突然、部屋のドアが開いた。

「よう、拓。ネットゲ楽しんでる？」

「入ってくんな。今忙しいんだよ」

そう声に出しながら、「じゃあ、マグに大森林で狩りしましょうか」とおっさ……乙津さんに申し出る。

「なんだ、初心者にしてはいろいろうまくいってるんじゃないのこれ？」

「初めは誰かに頼んだほうが速いんだよ、育つのが」

そして乙津さんは、

「いいよ、じゃあ行こうか。てゆうかさあ、その装備どこで手に入れたの？」

と答えを返しつつ、さりげなく質問してきた。

「おい、このクソ兄貴。このヒラヒラのロリータ服、どこで手に入れたんだよ」

「え？・・・ない・しょむかつく。」

そしてその通りに乙津さんに返す。

「え？・・・ない・しょ^^」

兄の存在を無視しパソコンに向かう。

「ね〜ね〜拓う、もうすぐ夏だね？拓には好きな女の子のとかいないの？」

「いない」

「つまらんなあ〜。お兄さんはなあ？毎年毎年たくさん女の子から海に誘われるんだよ。困っちゃうよな〜」

「そいつは良かったじゃね〜か。ついでに海水飲んで死ね」

「拓にも誘ってあげよっかなあ〜って思ってたんだけどなあ？」

「せんでいい。俺が知らない女だらけじゃつまんだろ〜が。ついでにそのうざい喋り方やめろって言っても直らないだろうから、とりあえず死ね」

「楽しみだね〜。いいね〜夏は」

「・・・ちなみにさあ、夏っていつから夏なの？」

「え？・・・暑くなったらじゃない？」

では今回はキャラ設定を整理したいと思います。

拓也 名字未定。本作主人公。心は中2の高校1年生。ツンデレ好きの重度の2次元オタク。

これは兄の影響が考えられる。

パソコン・2次元以外はヤル気0%の主人公です。

レナ 拓也(主人公)のネトゲ内のアバター。ピンクのヒラヒラロリータ服の金髪ツインテール。

兄、裕也が作り出したロリっ子設定。

姫 レナがネトゲ内で初めて出会う無敵賢者。装備は、魔道書・杖・短剣。金髪ショートで透き通る青色の目と黒のトレンチコートがチャームポイント。

女の子には優しいが、男にはツンとした態度をとる。ツンデレ設定。

乙津 正体不明のネトゲ内戦士。装備は斧。

現時点では本当に正体不明なので書くことなし。

裕也 名字未定。拓也(主人公)の兄。立派な社会人でありながら2次元に浸っている変態オタク。

ロリコン&シスコン

口調はうざったい。

玲奈 名字未定。拓也(主人公)の妹。くるりんとした肩までのツインテールが特徴。

持病で喘息を持っており、体が弱い。それにあやかって、性格は内

気。

家事全般をこなす、典型的妹設定。

こんな感じですね。

そこで、

読者の皆様に拓也（主人公）の家の名字を大募集したいと思います！！！！

評価・感想のコメント欄で受け付けたいと思いますので、皆様！なにかいい名字を私に教えてください！！助けてください！

出来ればコメントして欲しいです。

名字募集したのに、募集結果がないため、名字はなしで・・・なんてことになったら、とても悲しいです！

締め切りは・・・2月28日までです。

皆様からの素晴らしいアイデア、お待ちしております！！

それでは

恵恋

あれ？最近・・・

腰が、首が、痛い。

苦痛に目を開けてみると椅子に座ったまま寝ていたようだ。だがパソコンは消してある。多分裕也がまた勝手に入ってきて消したんだろ。

起き上がって軽く伸びをする。痛い。

そのまま制服を持ってきて着替えてから部屋を出る。下に降りるともう玲奈が朝食を作っていた。

「あ、拓兄おはよう。早くご飯を食べないともう遅刻しちゃうよ？」

「ああ、分かってるよ」

「あー！拓う、遅いぞ？！もうすぐ偉大なお兄様にご出勤するって言うのに」

「大いにご出勤してくださいクソお兄様この野郎」

テーブルの椅子に座ってトーストを口に運ぶ。

「じゃあ行って来るねー！玲奈、家帰ったらちゃんと鍵閉めるんだぞお？」

「分かってますよ、お兄ちゃん。行ってらっしゃい」

「がちゃんと家のドアが閉まる。」

「さ、拓兄。早く食べちゃってよね？食器洗っちゃうから口に運んだパンをそのまま放り込だ。」

「今日の放課後、指導室まで来なさい」

別に俺は不良じゃないと思う。そこまで悪いことは目立ってやったことないし、俺ずっと寝てるだけだし。あ、それか。

呼び出した教師は石川という男だ。名の通り科学の教師だ。

え？名の通りじゃない？

何を言ってるんだ。石川「科学なんだ。石川は歳はまだそんなに言っていないと思われる。20代中間くらいだろう。あ、ここテストに出るぞー？ノートとつとけ」

まあ、早いことに授業終了。もうちょっと真面目に授業内容まで書け？ごめん、本当書くことないんだ。寝てるだけだから。それにほら、このお話ゲーム内がメインじゃん。本当は。

「失礼しまーす」

がちやんと指導室のドアを開けると机が二つ、向かい合うように並べられていた。

まじかー。

だがその、石川はそこにはいなかった。

向かい合っている机の手前の椅子に座ってしばらく待ってしよう。

.....

うーん。遅いなあ。ったく、．．．あ、そういえば今日はかばんの中にPSR入れてきたんだ。ちよつとやるー。

そしてドアがガラガラガラ〜と開く。今時横スライドは珍しいですか。そうですか。

「ん？おい、お前何PSRやってるんだ！」

「んあ？悪いっすか？」

「当たり前だ。ほら、貸せ。没収だ．．．．．あっ！！これ、おま」

石川は play 中のゲームを取り上げた瞬間、その場で固まった。

「……これは、『萌え萌えドリル 増量中』じゃないかっ！ 萌え萌えシリーズの最新作を持っているとは……」

「え、何。知ってんの？」

「当たり前じゃないか。萌え萌えシリーズの同士がこんな近くにいたとは……。ちなみに俺はクーデレの静チンしず萌えだな」

「あー、静チンも可愛いけど、俺はやっぱりツンデレのアリスかなー」

「お前はツンデレ派か？なるほどな」

というように感じて話が盛り上がり、説教どころではなくなったよ
うな石川はいったん職員室へ戻り、袋の中の自分がもっている萌え
萌えシリーズを見せてくれた。無論、俺は全部持っていたが。

何で教師がこんなものを学校へ持ってきているか？質問してみたさ。
そしたら、

「俺は、1時間1時間の授業の合間にこれを1分間見てないと頑張
れないんだよ」

と答えた。

こんなものじゃないぞ、といつてもう一つの袋の中からエロゲーの
ディスクがたくさん出てきたのだ。

「うわ、大人の特権じゃん！すげ……。おい、これ1個貸してくれ。
出来れば一番お勧めのやつ」

「一番お勧めなのは、これかな。お前の好きそうなツンデレも出て
くるぞ」

兄が持っていないものを勧められたので貸してもらった。

いやしかし一番驚いたのは石川が同士だったということだ。

一見、科学教師というとお堅いかたイメージがあるが、……。いや、あ
ったが、以外に話も合いそうだ。

結局その日は説教されずに学校を後にした。

まあ、説教されても今の自分を変えることはないだろうけど。

さて。

そろそろ本題に入らないとこっちもヤバいからいくぞー。

パソコンの机の椅子に腰掛けて、電源を入れる。

確か今日も姫と待ち合わせていた。と思う。自信がないからメモを見よう。

6時に掲示板に待ち合わせ。か。よし、ちょうどいい時間だし先に行って待てるか。

ネトゲをやるときに未だに慣れないのが、自分のアバターだ。可愛い女の子の音声を聞きたびに自分の心がなんとなく傷つく。

掲示板のところで姫を待っていると、昨日姫と別れたあとと一緒に狩に行った乙津がいた。

気分的に関わりたくなかったから無視する。

前に乙津さんはおっさんみたいだとか何とか言ってしまったから親父っぽいイメージがついていると思うが、アバターの見た目、そんなに格好悪くはないのだ。

ファイター戦士だから、革の簡単な胸当てとベルト、ブーツを履いている典型的な戦闘タイプだ。乙津さんの髪の色は赤で黒いヘアバンドをしていて、そのヘアバンドで左目を隠している。若そうだ。

ちなみに姫は賢者セイジンだから装備はやるうと思えば比較的自由に出来る。それは魔道士マジックから昇格するときもそうで装備品を一つも貰えるのだ。だからゲーム内で一番オシャレなのは実は魔道の者だ。

「今日も来てたんだー。俺だよ俺、昨日の」

予想はしていたから驚いてないよ？うん。とりあえず愛想売ってこ。

「あー！乙津さんじゃないですか。どーも^^」

「今日もレベル上げ？よかったら今日も付き合おうか？」

「すいません。今日は待ち合わせている人がいて」

「じゃあその人も合わせてやるうよ。一緒に待ってるからさ」

親父を嫌う女の子の気持ちは分かった気がする。気持ち悪・・・

いやいや、この人は親父じゃない。たぶん。

しばらくして姫が来た。昨日と変わらず可愛らしい。

「レナー^^来たぜい」

そして、横にいる乙津さんに気づいたのか、そのまま沈黙が訪れた。

「あー、ええと、どうも。乙津って言います。お初ですw」

「……………どうも。で、レナ！今日はどこに行くの??」

乙津さんの挨拶にそっけなく返し、すぐさまレナに話を振ってくる。

「ええと、どこでもw 姫の行きたいところでもいいよー」

「じゃあキリア地方にでも行くか^^……………この人もくるの?」

「あ……………うん。昨日姫と別れたあとにレベル上げに協力してくれたんだ」

何となく姫から（嫌だな）みたいなオーラが出ている。うう、こめんよ姫

N o w L o a d i n g . . . 1 0 % (後 書 き)

あれ、半月くらい、更新してなかった。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0312g/>

2次コンおんらいん。

2010年10月14日12時08分発行